

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第二章 午前〇時一六分 午前一時一五分

ミス・ペティグールの目にうつったのは背の高い、質素でいかめしい建物でした。じつと見つめます。心が沈んでいきます。ミス・ラフォースに恨めしそうな視線を向けました。ミス・ラフォースはあたくしをがっかりさせるのかしら？　これがナイトクラブ？　両開きの扉を、地味な灯りが照らしています。案内係が丁寧なお辞儀をしました。「嫌な晩でございますね、ミス・ラフォース」
「本当にね、ヘンリー」

ミス・ラフォースは階段を上ります。ミス・ペティグールはさつきよりもずつとのろのろとついでに行きました。ドアが開き、背中で閉まります。ミス・ペティグールは息をのみました。豪華絢爛な眺めがはじけるように目に飛び込んできます。二人がいるのは大きなロビーでした。光と色と音楽と香りが押し寄せてきます。向こう側の端に上の階にのぼる大階段があります。女性たちが華麗なイヴニングドレスで行き来します。男性は上品な白と黒のみんなおそろいの服でエスコートしています。何もかもが金ぴかで光り輝き、話し声と笑い声が満ちています。ミス・ペティグールは生き返りました。目が輝きはじめます。これこそナイトクラブです。こつでなくつちやいけません。左側の扉が開き、その向こうから音楽が鳴り響いてきました。ミス・ペティグールの鼻は匂いをかぎつけた猟犬のようにびくびくうごめき始めます。

「こつちよ」とミス・ラフォースが言いました。
「どうぞお先に」とミス・ペティグール。

ミス・ラフォースは階段を上ります。ミス・ペティグールは後に続きます。二階の廊下も階下と同じくらいきらびやかでした。一階だけ立派に見せかけて、二階は安っぽいなんてことはないのね、ミス・ペティグールはうなずきました。これよ、これ。

二人はいくつものひっそりと閉じたドアの前を通り過ぎました。入ったのはご婦人用のクロークルームです。ふかふかのカーペットが敷かれ、シエードのかかったランプが置かれ、鏡は磨きたてられ、お手伝いをするメイドがうろつろしています。二人はコー

トを脱ぎ、鼻に白粉をはたき、ドレスを直し、また階下に降りていきました。

案内係がさつと素晴らしい扉を開けました。二人は中に入ります。ミス・ペティグルーはよろめいて立ち止まりました。広々としたホール。ぴかぴかの床。周りをテーブルが囲んでいます。遠くにいるバンドは静まりかえっています。ということはテーブルに座っているお客たちはこっちを見るかもしれません。パニックに襲われたミス・ペティグルーの前で部屋はどんどんどんどん大きくなっていきましました。このものすごく広い床を横切って、みんなの注目の的になって歩いていかなければならないのです。勇気がつま先からゆつくりと抜けていきます。

「さ、思い出して」とミス・ラフォースが慌てて言いました。「お腹を引っ込めて、肩を後ろに張るのよ。鏡があるでしょ。ちゃんといい場所に座らせてあげるから、ときどき覗いて元氣を取り戻してね。あなた素敵よ」

ミス・ラフォースは足を踏み出しました。ミス・ペティグルーは深呼吸をして続きます。ミス・ラフォースはほとんど全部のテーブルの誰かににっこりと笑いかけました。そしてほとんど全部のテーブルで、誰かがミス・ラフォースに挨拶します。二人は部屋を端から端まで横切っていく、奥のバンドのそばでミス・ラフォースは立ち止まりました。



Keiko Shimada

島田圭子画

ミス・ペティグールの膝はがくがくしています。心臓はどきどきです。ところがさらなる試練が待ち構えています。そのテーブルの周りにはたくさんの人が座っていたのです。何十もの見分けのつかない顔、顔、顔。友達の輪に無理やり入るあかの他人のように弱々しい笑顔を作ってみせました。こんな場違いな場所に来ようなんて、あたくし頭がどうかしていたのかしら？

でもそんなおびえは根拠のないものでした。びくびくする理由はなかったのです。ようやく目の焦点があつてきました。そこでミス・デュバリーが微笑んでいます。トニーがにやにやしています。マイケルがぴよんと立ち上がりました。もちろん、他にも人はいました。でも、それが何でしょう？ あたくしはお友達に囲まれているんだもの。ミス・ラフォース。ミス・デュバリー。トニー。マイケル。ほかに千人、人がいたつていいじゃありませんか。ミス・ペティグールは幸せのあまり、息をつまらせながら、本物の笑顔になりました。

「いったいどこにいたんだ？」とマイケルが問いただします。

「遅いわよ」とミス・デュバリーが文句を言います。

「もう来ないかと思ってたよ」とトニー。

「ウェイター」とマイケルが呼びました。「椅子を持ってきてくれ」

二人はようやく腰をおろします。ミス・ラフォースはちよつとした目立たない工夫をしてくれました。ミス・ペティグールは鏡に映った自分のはつきり近くに見えます。でも、心を落ち着けるためにちらりと鏡に目をやったものの、だんだんその必要がなくなつていきました。ミス・ペティグールは友達の優しさに包まれていたからです。トニーがこちら側に座り、マイケルがもう一方の隣に座っています。ミス・デュバリーはさつとミス・ペティグールの耳にささやきました。

「あたし、すごく幸せよ。みんなあなたのおかげだわ。あたしのビューティーサロンに来る約束、忘れないでね」

ミス・ペティグールはこの熱意あふれる感謝の言葉がいったい何のためなのか、いまだに見当もつきませんでした。そう言ってくれるのは嬉しくて、顔がまた輝きはじめました。

でも、こんなにトニーの近くにいと、また恥ずかしくてどうしようもなくなつてきました。いったいぜんたい今日の午後、何をトニーに言ったのでしょうか。必死で思い出すようにしますが、何も浮かんできません。ただ、はつきり覚えているのはものすごく無作法だったことだけです。ああ、このあたくしとしたことが。考えると顔が火照つてきます。みんなの会話が続きいる中で、消え入りそうになりながらトニーのほうを振り返つて袖に触れました。トニーは仲間同士だ、というようににやりとしました。

「ごめんなさいまし」とミス・ペティグールは小声で口ごもりました。「今日の午後のことですわ。あたくししたいへん無作法でございました。思い出せないのですけれど、確かに無礼なことをいたしました。そんな気がしますの。なんと言えばよろしいのかしら。

あたくし……やっぱりミス・ラフォーヌは正しかったんですわ。あたくしに下さったあのお酒だったんですよ。慣れておりませんの。きつと頭に回ってしまったんですわ。本当に恥ずかしくて、なんて申し上げたらいいのかわ。どうかどうか、お許しくださいませ。失礼なことを申すつもりはなかったんですの」

「無作法をしたって」とトニー。「僕に？」

「ええ」

「いつ？」

「今日の午後です」

「覚えてないな」

「あなたとお話していたときですわ」

「めったにないできない話だったね」

「でもあたくし、礼儀がなっておりますでした」

「僕は礼儀正しい女性なんか知らないからね。礼儀正しい人かどうかなんて分からないよ。だから礼儀がなくなってなくなつて気がつかない」

「ああ、どうか」とミス・ペティグールはおろおろと言いました。「あたくし真剣ですよ」

「僕だって」

「いいえ違います」

「なにが違つもの？」

「真面目ではありません」

「もちろん真面目じゃないよ」

「でもそうだつておっしゃつたじゃありませんか」

「そんなこと言わないよ。僕がぜつたい笑わないくそ真面目な男に見える？」

「あなたがぜつたい笑わない方だなんて言つてませんわ」

「でもそうほのめかしたよ。まったく」とトニーは苦々しく言いました。「自分がヘンリーに似てるなんて考えたこともなかった」

「ヘンリー！」とミス・ペティグールは途方に暮れて声をあげました。「ヘンリーってどなた？ ヘンリーが何の関係があるんですの」

「だつて、僕がぜつたい笑わないつて言つたじゃないか」

「あたくし、あなたは真剣じゃない、つて言つたんですわ」

「なんで真剣じゃなきゃいけないの？僕は沈没したホワイトシップ号の持ち主じゃないんだから」

「ああ、もつ」と可哀想に、ミス・ペティグールは泣き声を出しました。「何をおっしゃつてるのかさっぱり分からないわ」

「あなたは「トニーは憚然とした口調で言いました。「教育を受けた女性だろう」」

「それが何の関係がありますの？」

「ヘンリー一世のこと聞いたことない?」

「もちろん、ヘンリー一世のことは存じてます」とミス・ペティグルーはかつかとして言いました。

「それじゃどうして知らないふりして会話を台無しにするの?」

「知らないふりなんてしてません。わけのわからないことを話してるのはあなたですわ」

「わけて何の?」

「だから今日の午後のことです」

「でも僕らは今日の午後のことを話してなかったじゃないか」

「話してましたとも」

「ちょっと待って」とトニー。「もう一回頭を冷やそう。落ち着いて。ゆっくり考えをまとめるんだ。さて、僕らは何のことを話していたんだっけ?」

「あたくしが無作法だったことについてです」

「それじゃどうして」とトニーが言いました。「歴史の話になるんだ?」

「もう!」

困り果ててトニーを見つめます。トニーは自分の前をまっすぐ見えています。ミス・ペティグルーの中で困惑と腹立ちがせめぎあっています。突然、光が差しました。ミス・ペティグルーはくすくす笑います。

「まああなた」とミス・ペティグルー。「あたくしをからかってらっしゃるのね」

トニーの視線がこちらを向きました。目がきらつと輝きます。

「仕返しな」

「何をおっしゃっているやら」とミス・ペティグルー。「でも今日の午後に何か関係があるんですわね、きつと。そのこともお詫びしなくっちゃ」

「ああ!」とトニー。「またはじめるのかい。いったい何をそんなにあやまるっていうの?」

「今日の午後、あたくしが無作法だったこと」

「どう無作法だったっけ」

「もうかんべんして」とミス・ペティグルーは懇願しました。「どうか、もう堪忍してくださいな」

「わかったよ」とトニー。「でも別の言い方をしたほうがいいな」

「じゃ、今日の午後、あたくしがお話したこと」

「楽しかったよ」とトニー。「僕の手には余ったけど、楽しかった。独創性のある女性は好きだ。そういう人に会うことは少ない。謝ることはないよ」

「本当ですか?」ミス・ペティグルーは一生懸命聞きました。「礼儀正しくしよつとなさってるだけじゃない?」

「もし」とトニーは言いました。「まったく知らない他人のあなたが、午後、僕にひど

い侮辱を言ったとしたら、今、こんなに楽しくあなたと会話を楽しむと思うかい？ 侮辱を忘れるような男に見える？ 言っておくけど、そうだと答えたら、そいつを一個目の侮辱に数えることになるよ」

「おっしゃるとおり」とミス・ペティグルーはさっきよりうれしそうに言いました。「これほつとしましたわ」

「じゃ仲直り？」とトニー。

「ええ、仲直り」とミス・ペティグルーは幸せ一杯に言いました。

「それじゃもう」とトニーが宣言しました。「あんなに高度に知的な会話を続ける必要はないね」

「ありませんとも」とミス・ペティグルーがくすくす笑います。

「ああ助かった！」とトニーがため息をつきました。「僕の歴史の知識ときたら、ヘンリー一世がただの一度も笑わなかったことと、ウィリアム一世が一〇六六年にイングランドに上陸したことから、ジョン王が王冠をウォッシュ川でなくしたことだけなんだから、どっかで聞いた冗談話で覚えたんだよ」

「さあ」とミス・ラフォースの陽気な声がありました。「お二人さんたち、ちょっといやいやするのはお休みしてね。グウイネヴィアに他の人を紹介しなくちゃ。ごめんなさい、エデイス。恋人の隣に危険な女性を座らせちゃって」

「あらまあ！」

ミス・ペティグルーは慌てて振り返り、自分の無作法に顔を赤らめましたが、すぐに動転したことも忘れて、テーブルについていた他の人たちに興味しんしんになりました。がつちりした若い男が座っています。小さめの頭、短い金髪。明るい薄青い瞳は油断なさそうで、無表情な顔つきです。なんだか探検家のように見えました。その隣、ぴったりと寄り添うように、華やかな女性が座っていました。豊かなとび色の巻き毛と大きな紫の瞳をしています。太っているわけではありませんが、柔らかな丸い曲線と心地よくびれの印象を与えます。まるでモナ・リザやシャロット姫の風情。なにをするにもゆったりとして、物憂い気だるさが漂います。身にまとっているドレスは目の覚めるような紫。大きなきらきらするエメラルドが指に輝いています。もう一人の、とてもほつそりとした、今風のイギリス女性の隣にいます、まるでどこかよその国からきた豪華な花のようです。ミス・ペティグルーはうっとりとして、(きつとあの若いお方がどこか豊かな熱帯の国からつれて帰ってきたのだわ)と空想しました。

「グウイネヴィア」とミス・ラフォースが言いました。「こちらジュリアンよ。もしライバルがやきもちをやいて髪の毛をひきむしるのを見たかったらジュリアンのところに行くのよ。彼がドレスを見立ててくれるから。ただ高いわよ。彼があたしと仲良くしなきゃならないのは、あたしがうんと借りがあからなの。仲良くしてないとあたしが払わないって知ってるのよ」

ジュリアンの口が開き、ちらりと白い歯が見えました。

「はじめまして」とジュリアンは一言言いました。

「この人あんまりしゃべらないの」とミス・ラフォースが説明します。「ジュリアンってただ座って、新しい女の人が現れるたびに心の中で服を脱がせて、その人にふさわしい服装に着替えさせるのよ。それでね、いざその人が彼のところに来るとね、ぜつたい来ることになるわけなんだけど、彼、ひと目見るなり、その女性がどんな服を着るべきか教えるの。するとそのお客はジュリアンって天才だわって思って、何度も何度もお店に通うようになるのよ」

（あらいやだ！）とミス・ペティグルーは思いました。（ジュリアンさんがあたくしを見たらどうしましょう。真っ赤になってしまっわ）

「だが、僕のやり方に文句はつけられないだろっ」とジュリアンが穏やかに言いました。「その結果が満足のいくものならね」

「ロージー」とミス・ラフォース。「こちらグウィネヴィアよ。あたしのお友達」

「ようこそ」とロージー。

「ステーキとオニオンを注文しないでね」とミス・ラフォースはミス・ペティグルーに向かつて真面目に言いました。「ロージーはダイエット中なの。ぜつたい食べないけど、大好物なのよ。おいしそうな匂いをかいじゃったら今晚が台無しだわ。それとも、もっと悪いことになるかも。降参して食べちゃうかもしれないもの」

「しませんわ」とミス・ペティグルーは慌てて約束しました。

「お医者さんのところに行ったの」とロージーが暗い声で言いました。「お医者なんて最低。白身のお肉ですって。チキンだなんて。信じられる？ あたしチキンなんて嫌いなのに。肉の味がしないわ。脂肪もだめですって。フライもだめ。ポテトもだめ。バターもほとんどだめ。ケーキもだめ。じゃあ何があるって言うの？ 教えてよ。こんなことする価値ある？」

「あるわよ、もちろん」ときょつとした他の女性たちは声をそろえました。

「体型の流行が変わるかもしれないわ」とミス・デューバリーはなだめるように言いました。「そのときは、あなたはそのままでびつたりな体型で、あたしたちはみんな一日中、座りっぱなしで、ダンスもあきらめて、見るのも嫌になるほどクリームを何ポイントも飲んでなきやいけないのよ」

「あたしが五〇歳になる頃ね」とロージーは情けなさそうに言いました。「自分が太っていようがやせていようがどうでもよくなる頃にね」

音楽が始まりました。

「踊らないか？」とジュリアンが聞きました。

ジュリアンとロージーがフロアに出ました。ロージーは彼の腕に溶け込みます。吸い付くように身をゆだねる姿に、型の決まったダンスのポーズに二人の親密な関係が伺えました。二人は頬を寄せ合いながら、踊り去っていきました。

ミス・ペティグルーの目は二人に引き寄せられていました。「なんて美しい方でしょ

う！」とミス・ペティグルーは賛嘆の声をあげました。「あんな方にお目にかかったのははじめてですわ。あの方は外国人ですよ？」

「彼女は太るわよ」とミス・ラフォースが陰鬱に言いました。「見てなさい。毎回『いいえいらぬわ』とばかり言っつてられないわよ」

「彼女はハーレムタイプなのよ」とミス・デュバリー。「あたしハーレムタイプは嫌いの敵だわ」

「僕は好きだな」とトニー。「彼女たちは自分の居場所を心得て、頭でっかちになつたりしない。一人の男に仕えるんだ。他人は存在しない。彼女たちの居場所は後宮だ。他には何もいらぬんだ。震えがくるほど美しいこと、そして主人の欲望を満たすことだけが仕事なんだ。彼女たちにとってそれ以上何が？ 主人にとって何が不足だ？ 非常に満足すべき関係だと僕は思うね」

「なによそれ！」とミス・デュバリーは腹を立てて言いました。「あたしは自立した女性が好きなの。男らしい男だつてそのはずよ。結婚して六週間もたつたら飽きちゃうわよ。まったく！ いちごとクリームはときどきならすごくおいしいけど、毎日ずつとなんて……！ ぜつたいノーと言つたことのない女と暮らすなんて」

「俺もトニーに賛成だな」とマイケルが口を開きました。「最近の女というのは……」
「お黙りなさい」とミス・ラフォースが命令しました。「喧嘩はなし。みんなあなたが考えていることは知つてるわよ。時代遅れなの。グウィネヴィア、こちらリンゼイ夫妻よ。ペギーとマーティン。一年も結婚してるのに、まだ離婚してないの」

ミス・ペティグルーはあとの二人の方に向き直りました。二人とも、つるつとした若い、はつらつとした顔をしています。どちらも真つ直ぐな茶色の髪と青い目をし、朗らかな笑みを浮かべています。まるで双子です。マーティンの髪は滑らかに後ろに梳かされています。ペギーは額で前髪を切りそろえ、真つ直ぐに垂らした髪が耳の上にかぶさつています。

「仕事ではね」とミス・ラフォースが説明します。「リンゼイ・ツインズつて名乗つてるの。夫婦つていうよりも評判になるでしょう。コメディ役者よ。レヴューとかバラエティ・ショーとか、なんでもやるわ」

ミス・ペティグルーはこつした人たちに胸を躍らせ興味深く挨拶しました。大きく見張つたきらきらする瞳で室内を見渡します。ドラムがずんずんと響きます。シンバルが鳴り渡ります。サクソフォーンが物悲しい音を出し、ヴァイオリンが切なく歌います。ピアノの音が滝のように流れ落ちます。音楽が、立ち上がるうよと誘います。踊りだしたくなってきます。ミス・デュバリーとトニーが立っていききました。リンゼイ夫妻が続きます。ミス・ラフォースはミス・ペティグルーに見えないようにかぶりを振りました。若い男がマイクを持って歌っています。灯りが暗くなりました。ステップを踏む足が、それでリズムを作り出しています。

「ああこれが」とミス・ペティグルーは幸せそうに言いました。「ナイトクラブですよ」

ね！ それなのに、ずっとナイトクラブって邪悪な場所だつて聞いていたんですわ」
ミス・ラフォースは二階のぴつたりと閉じられたドアのことを考えました。
「そうね」とミス・ラフォースは用心深く言いました。「いろんなナイトクラブがあるわ。ここで王室の人に会うことはまずないわよ」

「とんでもない」とミス・ペティグルー。「王室の方々になんて会いたくありませんわ。そんな、おそれ多くてとてもとても。あたくしこのままで本当に幸せですよ」

音楽がやみました。ライトがつかみます。またテーブルに人々が戻ってきました。指揮者がミス・ラフォースに向かって合図しました。ミス・ラフォースがうなずきます。ミス・ペティグルーの耳にお友達の名前が呼ばれるのが聞こえました。それにこたえて嵐のような拍手が沸き起こります。明かりが落とされ、ミス・ラフォースはスポットライトを浴び、一人、フロアを横切っていきます。さりげない肩の動き。腰が優雅に左右に振れます。グランドピアノのところに着くと、それに寄りかかって立ち、一方の手を腰に当て、もう一方を磨き上げられたピアノの上にゆつたりと置きます。透き通った白いドレスを大胆に着こなしています。ぴつたりとした白いサテンのスリッパドレスは、素晴らしい身体の曲線をあますところなくきわ立たせる巧みなデザインです。その上に、透明なチュールのフレアスカートが床まで波打っています。それでいてどこか自然な純真さを感じられます。たった一つ、色のあるものはミス・ラフォースの輝く金色の髪。スポットライトの下で、後光のようにきらめいています。

いくつものコードがかき鳴らされ、ミス・ラフォースが歌い始めました。ミス・ペティグルーはゆつくりと座りなおし、息を殺して見つめます。プロの歌手を見たことはこれまでほとんどありませんでした。ナイトクラブのショーを見た経験といえば、たった一つの楽しみの、映画で見たことがあるだけです。本物をこの目で観、この耳で聴くのは全然違いました。あの白い姿、ピアノの前でポーズをとっているミス・ラフォースがミス・ペティグルーの、そしてその場のすべての人の注意を集め、息を止めさせているのです。

プロの顔になったミス・ラフォースは全然違う女性になっていました。態度も表情もほとんど変わらないのに、突如としてスターのもつ圧倒的オーラに包まれています。気だるい優雅さを漂わせてピアノに寄りかかり、ミス・ラフォースは室内を、ゆつたりと、自然な眼差しで見渡しました。眠そつな瞳に、ゆつくりとまぶたが被さっていくかと思つと、突然、大きく開いて悪戯っぽい、からかうような表情を浮かべます。ミス・ラフォースは深い、かすれた声をしていました。それは歌ともいえません。ミス・ペティグルーはそれを何と呼ぶべきか見当もつきませんでした。ほとんど、しゃべっているように聞こえるときもあります。でも、楽しく嬉しくて、背筋に震えがくるほどでした。ミス・ラフォースはちよつと際どい、面白い歌を歌いました。『週末、パパが留守の間にママはいったい何してた？』というのです。ミス・ペティグルーはそのわくわくする歌を隅から隅まで楽しみました。それがほのめかす意味を考えてばつとピンク色に頬を

染めはしましたが。その歌が終わると室内は拍手でどよめきました。ミス・ラフォースはヒットしているポピュラーソングを一曲、そしてもう一曲歌いました。その後のアンコールには首を振り、テーブルに戻ってきました。

「よかったわよ、ハニー」とミス・デュバリー。「あなた最高だったわ。ニックが手放したがないわけよ。あたし、あなたのライバルじゃなくてよかった。言いたくないけど、そうしたら友達じゃいられないもの」

「次はいつ歌うんだ？」とマイケル。

「二時半頃よ」とミス・ラフォース。

「なんだって！」マイケルはうなりました。「それまで待たなきゃならんのか？」

「誰もそうしてって頼んでないわよ」とミス・ラフォースは穏やかに言いました。

「さ、飲もうよ」とトニー。

ミス・ラフォースはミス・ペティグルーの方にこっそりと身を寄せると、早口にささやきました。

「忘れないでね。ぜったいチャンポンはだめよ。慣れてない人にはそれが一番きいちゃうの」

「何がいい？」とトニーが聞きました。

「あたくしは」とミス・ペティグルー。「シェリーをほんの少し頂きます」

トニーが目をまん丸にしました。

「聞き違いかな？」焦ったように言います。「年とって耳が変になっちゃったのかな？」

「あたくしの年齢になりましたら……」とミス・ペティグルーが始めます。

トニーは慌ててあたりを見回します。

「またあれはごめんだよ」と必死になります。「またあれを始めるのは勘弁してほしいな。今日の午後で十分だろ？ よし、シェリーだ、シェリー」

ミス・ペティグルーは訳が分からず、きょとんとしています。

「トライフル」とロージーが急に言いました。「スポンジケーキとラズベリージャム」

スプーン一杯のシェリーをかけて……眩暈がしちゃう。あたしはウィスキー」

「俺もだ」とマイケル。「ウェイター……」

みんなお酒を飲みました。いろいろな人がテーブルで立ち止まります。ミス・ペティグルーはこつした渡り鳥のことをいちいち気にしないことにしました。人間が覚えられる名前と顔の数には限度というものがあるのです。

「こちらジョーとアンジェラよ」とミス・デュバリーが大きな声で言いました。

ミス・ペティグルーは目を丸くして隣のテーブルの男の人がゆっくりと椅子に沈み込んでいくのを見ていました。あれじゃ今にテーブルの下に頭のとっぺんまでもぐってしまっわ。誰かお仲間が助けてあげるのが間に合うかしら？ それなのでミス・ラフォースが声をかけるまで全然、注意を向けませんでした。

「グウイネヴィア、こちらブロムフィールドさん。ジョー、こちらお友達のミス・ペテ

「イグルーよ」

紹介の仕方があまりに形式ばっていたのでびっくりして振り向きませす。

ジヨールがこちらを見下ろしていました。大柄な男性です。若くはありません。たぶん五〇代のはじめでしょう。中年太りをはじめた気配は少しもありません。年齢の割りに若々しいと言ってもいいでしょう。五〇代になると男性は恰幅がいいほうが格好良く見えるものです。一分の隙もなく夜会服を着こなしています。シャツの胸は真っ白に光り、ボタンホールには花がさしてありました。どっしりした頭、力強い顎、ユーモアをたたえた目、厳しい口元。髪に少し白いものが混じっています。態度は率直で、陽気な赤い顔をしています。

ミス・ペティグルーを見た彼の目は意外そうに輝きました。そして唇が開き、目をきらさせ、その顔には驚いたような暖か度で人懐っこい微笑みが広がります。同年代どうしというのはすぐに分かるものです。ミス・ペティグルーも同じようにびっくりして彼を見つめ、突然、その唇も開き、おずおずと、気後れしたように親密な微笑みをそつと浮かべました。二人は挨拶を交わしました。二人の属している世代は他のみんなとは違いました。二人は一瞬で共通点を見つけたのです。

「グウィネヴィア、こちらアンジェラよ。アンジェラ、お友達のグウィネヴィア」

そこには若い女性がいました。

「はじめまして」とミス・ペティグルーは恥ずかしそうに言いました。

「はじめまして」とアンジェラは無関心な間延びした、なんとなくつまらなそうな声で答えました。

ミス・ラフォースの友達のなかでミス・ペティグルーが怖気づいてしまったのはアンジェラが初めてでした。おなじみの居心地の悪さが一度に戻ってきます。アンジェラは本心に若くて、とてもきつい顔をしていて、そしてあまりにも冷淡で自信たっぷりでした。一目で借り物の美しい衣装の陰に隠れたミス・ペティグルーの正体を見抜いてしまいい、^{ハゲ}すんでいるように見えました。ミス・ペティグルーはわけもなく少し赤くなり、椅子の奥に身を縮めました。

アンジェラの真紅のドレスはぴったりと身体につき、つんとした小さな胸、平らなお腹、細い腰、すらりとした腿を際立たせています。髪は淡い銀色です。ミス・ペティグルーは目を見張ってその髪を見つめました。プラチナブロンドの人を見たのははじめてです。

（染めてるんだわ）とミス・ペティグルーは考えて満足しました。（ミス・ラフォースのは本物だもの）

アンジェラの顔は美しい無表情な仮面のようでした。まつげの先まで完璧なのに、でも、それを魅力的にする生気がありません。大きな青い目は長いカールしたまつげに縁取られ、鼻はまつげ、美しいピンクと白の肌をし、非のうちどころのない真紅の薔薇のつばみのような唇をしています。髪に乱れたカール一つありません。完璧な女性美の

芸術作品でした。とはいってもミス・ペティグルーは、お風呂からでてきたところを見ただけではないので、判断を控えることにしました。

ミス・ペティグルーは心の中でため息をつき、目をそらしました。こんな素敵な男性が若い小娘につかまってしまふなんてねえ！ 欲しいものが手に入るんじゃないかなければ若い娘が年上の男とつきあったりするものじゃないって、まともな頭のある女ならみんな分かっていることなのに。男といつものは中年になると本当に愚かで女に弱くなってしまうものねえ。

ブルムフィールド氏とアンジェラは見るからに親密な様子でした。

「座ってくださいよ」とマイケル。

「お邪魔じゃないかね」とジョー。

「とんでもない」とロージー。

「ありがとう」とジョー。

アンジェラは何も言いません。前に、しゃべりすぎたり、笑いすぎたり、表情を動かさすぎたりすると老ける、と聞いたことがあったからでした。話すことがあったためしがないというそもその問題もありましたが、アンジェラは外見を守り抜く決意だったのです。

「ウェイター」とトニーが呼びました。「椅子を持ってきてくれ」

もう一つ小さなテーブルと椅子が二つ加わり、みんなの輪が広がりました。バンドが音楽をはじめました。ミス・ペティグルーとミス・ラフォース、そしてマイケル以外のみんなが立ち上がって踊ります。ミス・ペティグルーはミス・ラフォースのことを思っちょつと申し訳なくなってきました。ダンスの間一人で座っているのは大丈夫だと申し上げなくちゃ。次の時にはきつとそう言うことにしましょう。ジョーですら、なんだか殉教者みたいな顔つきではありますが、ほっそりとしたアンジェラを腕に抱いてフロアを重々しく行ったりきたりしています。音楽がやみました。また、みんなでおしゃべりする楽しい時間になります。そして音楽が始まりました。

「踊ろつか？」とトニーがミス・デュバリーに言います。

「僕らの曲だ」とジュリアンがロージーに言います。

「ご披露する？」とマーティンがベギーに言います。

一人ずつ席を立っていきます。ミス・ペティグルーはその背中を、ちょっぴり切ない気持ちで見送りました。忘れられた青春と失われた機会。

ジョーが立ち上がります。ミス・ペティグルーの前にぬつと立ちます。大きくて、幅広くて、愛想の良い顔。

「踊っていただけますか？」ジョーは言いました。